常葉大学外国語学部紀要
第31号　2015.3.　71頁～　84頁

共生社会における生活課題解決を目指した社会貢献活動支援プログラムの実証研究

―大学生の地域社会貢献活動を踏まえて―

星　野　洋　美

A Study of a Support Program for Activities Towards Social Contribution in the Local Society

Hiromi HOSHINO

2014 年 11 月 22 日受理

Abstract

The first purpose of this study is to clarify the present state and problems of social contribution activity which aims at assisting the socially vulnerable.
The second purpose of this study is to planning, practicing, estimating and completing new support programs for social contribution activities which aims at realizing the best symbiotic societies.
The results are as follows: the existing state
1) Foreign people and handicapped people have many problems in their adaptation to local communities. Roughly, the problems can be classified into two natures: prejudice and lack of understanding. Particularly, the problem of prejudice is fatal. This problem makes of their adaptation to local communities more difficult situation.
2) Developmental support program for activities is effective social contribution activity which aims at educating global citizen for realizing of a best symbiotic society.

Ⅰ．研究の背景および目的

地域社会において期待される大学の役割の一つとして、災害時や福祉、地域支援活動などに投入できる人的資源としての若い学生たちのマンパワーやホスピタリティの活用、そして大学での専門的な研究や学習によって得た知識の還元がある。現時点において、各所からの要請に応じ、県内の町おこし、教育機関での学習支援や学術イベント、多文化共生や国際交流関連のイベント、通訳ボランティアを要する医療や国際協力の場で、多くの本学の学生が活躍していることが、マンパワー等の活用や大学で習得した知識・技術の還元を物語っているといえる。

このような状況を踏まえて、「本学学生の地域社会貢献活動支援に関する実態調査研究」という研究テーマを設定し、共同研究プロジェクト（平成 25 年度より）を立ち上げた。プロジェクトの目的は、“大学での研究や学習成果の地域社会へのより良い還元方法”、“大学生ならではの『ボランティア活動』の在り方”、それらに伴う“大学生の学習意欲の亢進”の探求である。

プロジェクトでの研究活動の１つである本研究の目的は、研究プロジェクトの３テーマを踏まえつつ、地域の方々と大学生の双方にとって効果的な地域社会貢献活動をおこなうための必須要件について明らかにすることである。

研究の方法は、主に、実態調査および参与観察法である。本学学生の地域社会活動事例を取り上げ、実態調査・実践および結果の分析・評価、そして検討を通して、要件を具体化していきたい。今回取り上げた活動事例は、共生社会をキーワードとした「障がい者福祉について理解を促すための活動」と「静岡県文化財団による先人展での鈴木梅太郎の展示パネル製作」の 2 事例である。

Ⅱ．活動の実態

１．障がい者福祉について理解を促すための活動（障がい者福祉に関する協働事業）

⑴活動内容

①「平成 26 年度　静岡県授産製品コンクール」の審査

・日時：平成 26 年 10 月 1 日 10:30 ～ 16:30

・場所：障害者働く幸せ創出センター

・内容：作品部門、製品部門（縫製・木製品・雑貨・食品）の審査（評価）

②静岡県の行政・企業・地域と障がい者支援事業所をつなぐ中間支援団体「NPO 法人　オールしずおかベストコミュニティ」と、障がい者支援事業所「社会福祉法人　愛誠会」のバックアップによる、障がい者支援の実際を知るための研修～障がい者の地域社会活動参加のための提案（表Ａ参照）

表Ａ：10/8・15・22 の活動プログラム

日程	講座　内容	担当及び支援	備　考
10/8	＜障害福祉事業にかかわる 3 つの話＞ ・中間支援機関 /ALL-SBC(静岡県の事例)/ 障害福祉の方向 ＜現場の話＞ ・サービス管理責任者からみる支援員の活動	担当：All-SBC スタッフ 担当：現場担当者 ワーク薬師　大澤氏	PowerPoint 参照
	・質疑応答	同上	
10/15	＜視察《ワーク薬師・望未園》＞ 10：35 出発→ワーク薬師・望未園の見学（60 分）→ 12：35 着	担当：現場担当者 ワーク薬師　大澤氏	バスで移動 (参加者)
	見学中の質疑応答有り	同上	
10/22	＜グループワーク＞ ・グループ毎にテーマについての話し合い→発表 ＊スタッフ及び講師は、グループを周り学生の質問やアイディアに助言・支援	ファシリテータ：星野 助言・支援： All-SBC スタッフ、 ワーク薬師　大澤氏	付箋、画用紙、マジック等
	・グループワーク テーマ「地域社会活動における障がい者自身の参加についての問題点と、問題を解決するための具体的な提案」 ※この話し合いをもとに自分の考えを示したレポートを作成		＊個々で、レポート作成および提出

③「静岡県障害者芸術祭 2014」にて障がいのある人を支える仕事体験ブースサポート

日時：平成 26 年 10 月 25 日（土）10:00 ～ 16:00

場所：障害者働く幸せ創出センター

内容：障がいのある人を支える仕事体験ブース「わくわく体験ミュージアム」でのサポート

※静岡県障害者芸術祭 2014 の内容については、資料 α 参照

⑵学生の活動意識

①事後レポートおよびアンケート調査から明らかになったこと

A) 社会参加における問題点（事後レポートより）

地域社会活動に障がい者が参加する際、想定される問題については、立場によって問題の観点が異なっている。中には、「すべて障がい者でない私たちが想定していることなので、障がい者にたずねたら随分違ってくるのかもしれない」という意見もあった。詳細については以下の表に示した。

	市民（障がい者ではない）	行　政	障がい者
項目	偏見・先入観　33 人	バリアがある　20 人	コミュニケーション不足　3 人
	無理解　30 人	受入れ体制不備　19 人	自ら関係をつくれない 5 人
	助け合い精神の不足　4 人	雇用のニーズが少ない　21 人	仕事が限られる　18 人
	接し方がわからない　8 人	賃金が低い　28 人	能力が低い　16 人
	障がいの種類や度合が 1 くくり　8 人	配慮が不足　4 人	できないことが多い　6 人
	知識不足　22 人	触れ合う機会が少ない　20 人	サポートが当たり前　8 人
	距離をおく　2 人	社会的地位が低いことを容認　6 人	情報の入手が困難　4 人
	価値観の押しつけ　7 人	法整備の遅れ　5 人	マナーを知らない　2 人
	見下す　2 人		

B) 社会参加促進のための手立て（事後レポートより）

主に、障がい者に対する偏見を無くすことや、障がい者との相互理解を促すことが、手立てとして記されている。問題を解決するためには、個々の取り組みも大事ではあるものの、やはり国・自治体・教育機関・企業等での取り組みが必要であるといった意見が多かった。詳細は以下に示した。

支援機関	社会参加促進のための手立て
市民・行政 （相互理解）	・市民レベルでの交流の機会をできるだけ多く設ける。（18 人） ・価値観の共有（2 人）
教育 (家庭、学校、社会)	・自然なサポートや譲り合いの推奨 (3 人) ・正しく理解する場を設ける（4 人） ・理解や偏見の払拭のために、特に子どもたちの教育に取り入れて学ばせたい。（12 人）
企業、行政 （雇用支援）	・企業側の理解と支援（6 人） ・Decent Work 注釈①をめざした取り組み（1 人）
授産施設、行政 （販売促進と 福祉への理解）	・障がい者の作成したもの〈優れた作品や良い商品など〉をどんどん売り込み、理解や支援を促す。（6 人）

行政 （Normalization）	・障がい者の要望を受け入れる体制作り（1 人） ・仕事と暮らし全般のサポートをおこない、1 人でも暮らせるようにする（2 人） ・行政の対応向上（2 人） ・バリアフリーやユニバーサルデザインを進める政策の推進（5 人） ・サイン表示の工夫（3 人） ・サポーターを増やす（4 人）
マスメディア （報道の影響）	・報道の配慮（4 人） 「障がいを持った人や外国人が関わる犯罪や事故があった際、当人以外の障がいを持った人や外国人等に偏見の目が向けられないよう、報道の仕方を考慮すべきである。」

②障がいに関するアンケート調査の結果

家族に障がい者がいる方が 8 名、障害者福祉への関心が高い人が 8 名となった。家族に障がい者がいる学生は障害者福祉への関心が高いと思われるが、実際は家族に障がい者がいないと答えた人の内 5 名と、家族に障がい者がいる学生のうち 3 名が関心が高いと答えていた。福祉についてのボランティアやイベントへの参加経験、学校での学びや交流活動といった経験が、本人にとってどのようなものであったのかによって関心度が決まることがわかった。

本活動および対象の学生は、障がい者福祉の仕事に携わることを目的とした学部（学科）に所属している学生ではなく、教育系の学部所属の学生であるため、この基本属性調査では福祉教育の必要性を強く感じているようだ。特に生涯学習学科の学生については、学校教育のみでなく、社会教育およびイベントや交流機会を設けることに肯定的であった。詳細については資料 1 に示した。

資料 1：調査の結果

対象：大学 1 ～ 4 年生 42 名（男性 21　女性 21）

1) 障がい者との接点

家族に障がい者がいる（いた）8、友人知人 12、学校にいた 9、交流有 24、全くない 4

2) 障がいの種類について

理解できている 14、　　ほぼできている 28

3) 障がい者福祉について

関心がある 8（男 3　女 5）、少しある 32、　ない 2（男 1　女 1）

4) 障がい者理解の方法

広報 7、ボランティア 22、イベント 23、学校教育 27、社会教育 9、交流 25

5) ノーマライゼーションの意味

よくわかる 28、　だいたいわかる 12、　わからない 2

6) 障がい者差別の有無

ある 38、　ない 4、　わからない 0

7) 差別があると思う場面

就労・雇用 24、ショッピング 6、教育 15、交通機関 13、行政サービス 2

8) 障がい者に優しい町か（今住んでいる町：静岡県内）

とても優しい 1、 優しい方である 16、 優しくない 11、 わからない 14

2．鈴木梅太郎のパネル製作

⑴活動内容：グランシップでの先人展の鈴木梅太郎のブースでの展示用パネル製作

（日時・場所：平成 25 年 5 月 1 日～6 月 30 日　常葉大学）

⑵製作過程における活動意識

①共生社会を意識しての配慮：日本語とポルトガル語でのパネル作成

②個々の理解を深めるため：毎週月曜日に勉強会を実施

⑶活動結果（パネル）

パネル１）鈴木梅太郎が発見したオリザニン（ビタミンＢ１）とは何か？

鈴木梅太郎が発見したオリザニン（ビタミンＢ１）とは何か？

ビタミンは、からだの発育や活動を正常に機能させるために微量に必要とされる有機化合物で、体内で必要量を合成することができないため食品から摂取しなければならない。体内でビタミンが不足すると、様々な欠乏症をひきおこし、健康を害するばかりか生命活動の維持も困難になる。ビタミンは私たち人間にとって必要不可欠な微量の栄養素である。

不足することによって起こる様々なビタミンの欠乏症として歴史的に有名なものは、多くの人命を奪ったとされる 5 大欠乏症である。5 大欠乏症とは、脚気、壊血病、ペラグラ、悪性貧血、くる病で、それらの予防因子としてビタミンの存在が明らかにされてきた。

（表１「5 大欠乏症と予防因子について」参照）

1910 年に、5 大欠乏症の一つである脚気の予防因子の結晶を米糠から取り出すことに成功したのが、鈴木梅太郎である。当時、梅太郎はこの脚気の予防因子をオリザニンと命名した。このオリザニンが現在のビタミンＢ１である。

脚気（多発性神経炎）の症状については、まず全身の倦怠感や、知覚過敏、心悸亢進（動悸）、手足のしびれ、歩行障害などがあらわれ、悪化すると心臓

肥大や呼吸困難などの循環器不全に陥ってしまい、ショック状態で死に至ることもあるという。

日本で脚気が流行しはじめたのは江戸から明治にかけてである。貧しい農民達が麦・粟・稗などの雑穀を主食にしていたのに対して、江戸一帯にかけては白米を主食とする習慣が広まり、これが脚気の流行（当時の脚気の呼び名は「江戸わずらい」）を招いてしまったといわれている。

明治期には白米主食の浸透とともに、脚気は全国に拡大し、結核と並ぶ二大国民病と言われ、当時年間一万人もの死者を出し続けた。

（大正期の軍隊での脚気流行と対策についての逸話は巻末の資料に提示。）

私たちの身体に必要不可欠であるビタミンＢ１は、炭水化物（糖質）がエネルギーにかわるときに必要な補酵素であり（Ａ図参照）、消化液の分泌を促進させ、神経機能を正常に保つ働きをします。不足すると、これらの生理機能はマヒし、欠乏症状として食欲不振，倦怠感等の諸症状があらわれ（Ｂ図参照）、さらに脚気やウェルニッケ脳症（欧米に多い中枢神経が侵される脳症）となり、生命活動の維持が困難に陥ってしまう危険性もある。（ビタミンＢ１を多く含む食品については表 2 参照）

参考文献：①吉川敏一著「ビタミンミネラルの本」土屋書店 2012‘、②実教出版編集部著「ニュービジュアル家庭科資料＋成分表 2012」実教出版

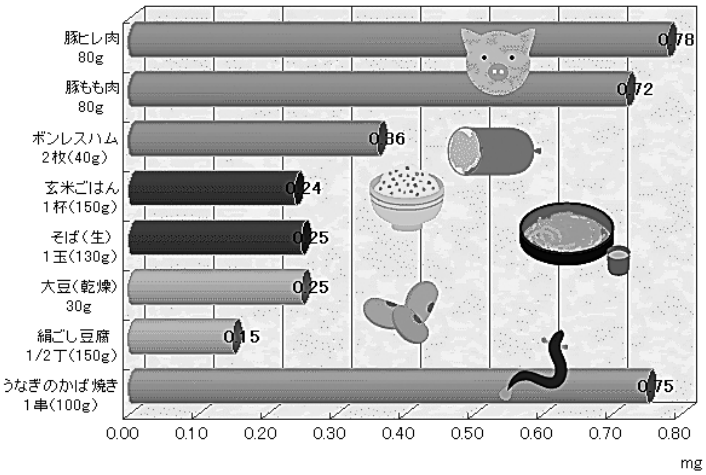
写真出典：東京大学能楽生命科学研究科ホームページ（梅太郎肖像、オリザニン標本類、直筆ノート、直筆特許草稿などビタミン B1 関係の資料は、東京大学大学院農学生命化学研究科、理化学研究所、国立科学博物館に保管されている。）

パネル２）５大欠乏症の予防因子とその発見者（表１）

欠乏症	予防因子	症　　状	予防因子発見
脚気	ビタミンB1	多発性神経炎と呼ばれ、倦怠感や知覚過敏、動悸、手足のしびれ、歩行障害などを伴い、悪化すると心臓肥大、呼吸困難などの循環器不全、ショック状態で死に至ることもある。	1910年 鈴木梅太郎（オリザニン） 1912年　フンク〈ポーランド〉 (ビタミン〈活性アミン〉)
壊血病	ビタミンC	毛細血管が破れやすくなって、歯茎や皮膚および消化管などに出血をきたし、貧血、体重減少、免疫力の低下などが起こる。	1920年 ドラモンド（英国） （水溶性C因子） …他説あり
ペラグラ（伊語）	ナイシン（ニコチン酸）	激しい皮膚炎や慢性下痢、中枢神経の異常が起こり、脳障害から認知症に至ることもある。	1926年 ゴールドベルガー（米国） （ビタミンＰＰ）
悪性貧血	葉酸、ビタミンB12	骨髄中に赤血球になれなかった前段階の赤芽球生成蓄積による貧血で、舌痛、萎縮性胃炎や知覚障害なども生じる。	1944年スネル（米）（葉酸） 1948年　フォルカース（米）スミス〈英〉 （ビタミンB 12）
くる病	ビタミンD	骨が軟化して柔らかくなり、背中や足が曲がってしまう骨疾患。	1922年　マッカラム（米）（ビタミンD）

《パネル１に記した参考文献①②等を参考に作成》

パネル３）ビタミンＢ１を多く含む食品（図１）

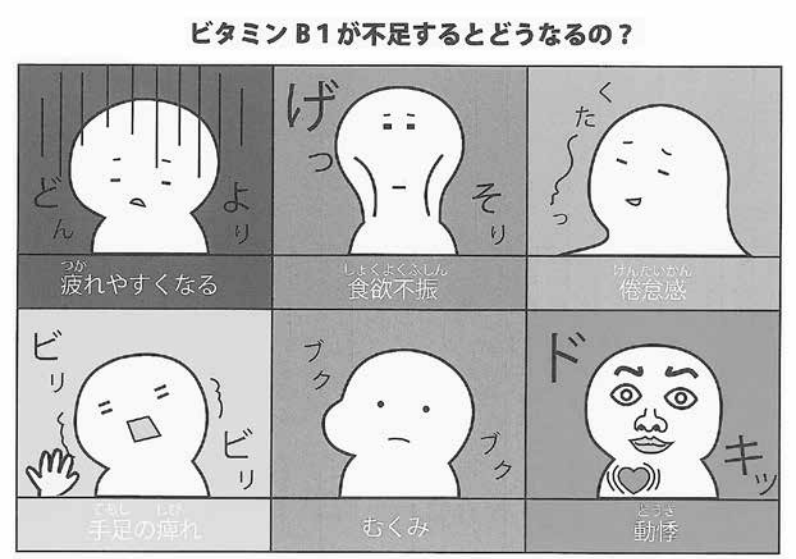


《日本成人病予防協会（特定活動非営利法人）のホームページ「食ＤＯ！」より引用》

パネル４）ビタミンＢ１の働き[1)]

～糖質がエネルギーにかわるときに必要な補酵素～（図Ａ）

パネル５）ビタミンＢ１欠乏症状[2)]（図Ｂ）



パネル６）軍隊での脚気流行について（資料２）

「軍隊での脚気流行について」

日清・日露をはじめ、日本が経験した戦争において、もっとも大きな被害をもたらしたのが脚気であったといわれている。当時の医学においては、脚気が栄養障害病であることを解明できていなかったからである。米と麦を混ぜた飯でこの病気を防ぐことができることを経験上知っている人々が、そのことを進言したが、陸軍は根拠のない治療方法に耳を貸さず、白米食を続け、甚大な被害を出してしまった。

海軍全体の脚気患者は兵食の変更（洋食、麦飯の採用）によって比較的早く激減したが、陸軍は医務局が脚気と麦飯との関係を認めなかったことや細菌説を採用し続けたため、解決まで多大な時間を要したという。

日露戦争では陸軍の被害は大きく、戦死（即死）者 48,400 余名に対して、傷病死者 37,200 余名、うち脚気による死者は 2 27,800 余名にのぼったという。反麦飯論者として有名なのは、第 2 軍軍医部長であった森鴎外と東大医科大学長の青山胤通、軍医部の長老の石黒忠悳である。戦後、明治 41 年 5 月に「臨時脚気病調査会」が陸軍の提唱で設立され、その発足会で陸軍大臣の寺内正毅が陸軍では麦飯を支給すべしと宣言して陸軍の方針は決着した。その後、大正元年の鈴木梅太郎のオリザニンの発見などによって脚気問題は医学的にも解決した。

（内田正夫／総合文化研究所の研究プロジェクト：近代日本の戦争と軍隊「日清・日露戦争と脚気」より）

パネル７）鈴木梅太郎が発見したオリザニン（ビタミンＢ１）とは何か？＜ポルトガル語訳＞

O que é Orizanin (vitamina B 1) descoberto por Suzuki Umetaro?

A vitamina é um complex organico necessário para o desenvolvimento e bom funcionamento do corpo humano. Como a quantidade necessária de vitamina não pode ser sintetizada naturalmente dentro do organismo humano, torna-se necessário adquiri-la atraves da alimentação cotidiana. A carência de vitamina traz vários problemas à nossa saúde e muitas vezes pode até causar o risco de morte. A vitamina, embora, seja normalmente ingerida em pouca quantidade, é uma substância nutritiva imprescindível para nossa vida saudável.

A própria história registra fatos em que milhares de mortes foram causadas pela deficiência da vitamina. As 5 maiores doêncas causadas pela carência de vitamina são : .beribéri, destruição dos globulos sanguíneos, pelagra, anemia grave, deformação de caluna vertebral e ossos dos membros. A vitamina é um fator importante para prevenir as doênças acima mencionadas (ver o grafico No.1 (「Os 5 sintomas de deficiência e fatores de prevencão」).

Em 1.910, Suzuki Umetaro, conseguiu extrair do farelo de arroz, o elemento importante para a prevencão do beribéri., ao qual denominou Orizanim, atual vitamina B 1.

Os priicipais sintomas da doença beriberi são: fragilidade corporal, dormência nos membros superiores e inferiores, dificuldade de locomoção, e no caso extremo, intumescimento do coracão, falta de respiração . O paciente pode chegar a perder a vida em estado de choque.

A epidemia da doenca beriberi, no Japão, teve início no final da era Edo para o início da Era Meiji. Até então, o alimento principal da população rural pobre eram cereais como trigo, painço (milho miúdo) e “hie”uma espécie de capim de celeiro, ao passo que, os habitantes da região de Edo, capital do pais se alimnetavam diariamente de arroz branco. Assim, ocorreu na região de Edo, o surto da doença beriberi, que na Era Meiji se expandiu para todo Japão. Na época, a beriberi e a tuberculose eram consideradas duas doenças fatais do povo japonês. Anualmente, mais de 10 mil pessoas faleciam por causa de beriberi. (os dados sobre o surto da beriberi no exercito japoneses , na Era de Taisho, e medidas tomadas para sua extinção, estão anexos no final).

A vitamina B 1, imprescindível para o corpo humano, é o enzima que ajuda a transformação dos carboidratos em energia (ver o grafico A), ativa a secrecão do liquído digestivo, mantem estável a funcão dos nervos. A deficiência da vitamina B, causa a paralização dessas funcões fisiológicas, e faz evidente os sintomas como falta de apetite, fragilidade corporal (ver o gráfibo B), além da beriberi, disturbio mental Wernikke (disturbio mental frequente na Europa e USA). Esses sintomas quando grave, pode levar o paciente à morte.

パネル８） ５大欠乏症の予防因子とその発見者３）＜ポルトガル語訳＞

Gráfico No. 1: Os Elementos Preventivos da Carência e seu Descobridor

Deficiência	Elemento preventivo	Sintomas	Descobridor
Beriberi	Vitamina B1	Disturbio nervoso multiplo, fragilidade, palpitacão, dormência, dificuldade de	1910,Suzuki Umetaro

		locomoção, coração inchado, falta de ar, disturbio cardio vascular, estado de choque	(Orizanin) 1912, Funk (Amin)
Destruicão Sangue	Vitamina C	Rompimento das veias capilares, sangramento das gengivas,anemia, perda de peso, baixa de imunidade	1920, Drumond
Pelacra	Niasin	Inflamação da pele, disturbio cerebral caducidade, diarreia, etc.	1926 Gold Belga（Vitamina PP）
Anemia	Vitamina B12	Anemia grave, devido a falta de globulos vermelhos, dor na lingua, dor de estomago, sensibilidade anormal	1944 Sunil (Anemia) 1948 Forka-s Smith（Vitamina B12）
Deformação Coluna	Vitamina D	Amolecimento dos ossos e deformação da coluna vertebral	1922 Mac Karan

Ⅲ．終わりに

大学生の地域貢献活動は、特に地方都市においては大学の存在価値を考える際の重要な要件の一つであると思われる。大学は、貴重な人的資源或いは学術的資源を地域社会における問題解決のために活用できることで、その存在意義がより明確になることから、大学生の地域貢献活動は大変重要な使命を担っているということになる。

地域での様々な活動は、学生にとっても社会教育の場となったり、就職に向けての第一ステップであったり､社交の場であったりと魅力的な機会となっていて、有益なものと捉えられている。本学においても、外部からの評価も高く、体験者の満足度も高いことから、参加者は年々多くなっている。しかし、地域での様々な活動の中にはボランティアと称した無料労働や、広告塔などに利用されるといった動きもあるので、十分注意しなければならない。実際に、ごく少数ではあるが、依頼される頻度が高くなり、人員補給も任されて、疲労困憊してしまう例も存在するくらいである。

一般的に若者の地域貢献活動は 、社会にとって重要とされ、様々な所で相乗効果をもたらしていると言われているが、それらの活動について、実態を明確にすることや評価する動きは少ない状況である。今回の調査研究では、学生の活動の

現状を正確に把握することに努めた。また、活動に関わる学生たちの意識や認識について調査をおこない整理していった。これらの過程において、メリット・デメリットそして課題が明らかになった。

今回注目した活動において明らかになった課題は、効果的な活動をおこなうための準備が不十分であることや、活動に関わる学生すべてが主体的に関わることが難しいことなどであった。そこで、これらの課題を解決し、継続的かつ効果的な地域貢献活動の発展を目指したいとの思いから、社会貢献活動支援プログラムについての実証研究をおこなった。

この研究では、効果的な活動をおこなうための準備を、事前学習であり、専門知識の豊富な方や活動に従事している方から学ぶこと、さらには現状を把握するための実地研修であると考えた。そこで、「障がい者福祉に関する協働事業」の中に、『行政・企業・地域と障がい者支援事業所をつなぐ中間支援団体「NPO 法人　オールしずおかベストコミュニティ」と、障がい者支援事業所「社会福祉法人　愛誠会」のバックアップによる、障がい者支援の実際を知るための研修（表Ａ参照)』を取り入れた。

このプログラムの効果については、今後も評価観察を継続しつつ、見守っていきたい。

今回は、大学の講義と関連づけて取り組んでいる活動に焦点を当てた研究で、支援プログラムについても学生側にとっては受動的なものであったが、今後は学生自身が自らの判断で取り組んでいる活動に焦点を当て、能動的におこなう支援プログラムの開発を目指した研究をおこなっていきたい。

引用文献および出典（本文中に記載）

参考文献

１．佐々木英和・戸室憲勇 (2010)、
「大学の社会貢献に関する一考察－特に人材養成機能に着目して－」
宇都宮大学教育学部紀要 第 1 部 宇都宮大学教育学部編 60 号　pp107- 121

２．吉川敏一 2012「ビタミンミネラルの本」土屋書店

３．実教出版編集部 2012「ニュービジュアル家庭科資料＋成分表 2012」実教出版

４．社会福祉法人静岡県社会福祉協議会 2009「障害に関する県民福祉意識調査報告書」

5「ILO 総会事務局長報告：21 世紀の ILO の中心的な目標」（第 87 回 ILO 総会『働く価値のある仕事の確保』）ILO ジャーナル 1999 年 5 月号 No.475

注

１）２）図の作成者：望月飛鳥（常葉大学造形学部 4 年生）

3）作成協力者：ジャンジーラ前山（元常葉大学外国語学部教授）

注釈

① Decent work（ディーセント・ワーク）

ディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）」の概念は、1999年の第87回ILO総会に提出された事務局長報告において初めて用いられ、ILOの活動の主目標と位置付けられた。（厚生労働省「ディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）について」）

謝辞

調査に際し、NPO法人「オールしずおかベストコミュニティ」の松本様はじめスタッフの皆様、社会福祉法人「愛誠会（ワーク薬師・望未園）」の大澤様はじめスタッフの皆様に、厚くお礼申しあげます。

また、平成25年度の学内の共同研究「本学学生の地域社会貢献活動支援に関する実態調査」において本研究全体の企画から立ち上げまで中心的役割を担い、支援してくださった三村友美様に、厚くお礼申しあげます。

資料α：静岡県障害者芸術祭2014の内容